

相川

相川町は佐渡島の北西部に位置し、江戸時代（1603～1868 年）初期の「ゴールドラッシュ」最盛期にはたいへんな賑わいを見せていました。佐渡島の金採掘の歴史を通じて、計 78 トンの金が産出されましたが、島全体の中で相川が最も貢献しました。

盛況な採掘産業は、仕事を求めるたいへん多くの人を佐渡に引き付けました。1600 年代初めの最盛期には、相川には 40,000～50,000 人が住んでいました。参考までに、現在の佐渡島全体の人口は、2018 年 3 月時点で約 56,000 人でした。相川における金銀双方の主鉱山は「道遊の割戸」で、この山はたいへん深く掘り進められ、文字通り山が半分に分かれました。佐渡で銀が発見されたのはすぐ近くの鶴子、その鉱山は 1542 年から 1946 年まで操業していました。

相川の鉱山では、佐渡島の鉱業が衰退し始めた江戸時代の終わりまで、伝統的な採掘技法が採用されていました。明治時代（1868～1912 年）の初めから、日本は国外の新たな慣行の導入など産業の近代化をはじめ、これによって抗夫はより深く掘り、より多くの地下水を排出することが可能となりました。北沢浮遊選鉱場や高任のエレベーターシャフトなど、この時代の建造物の多くが、今でも相川に保存されています。

来訪者は、「きらりうむ佐渡」や史跡佐渡金山で、金銀採掘の歴史を学ぶことができます。「きらりうむ佐渡」は金山・銀山の歴史を説明している情報センターです。史跡佐渡金山では、2 つの採掘坑を巡って、貴金属が採掘された場所を見学することができます。狭い方の宗太夫抗は江戸時代に使われ、もう一方の道遊抗は、鉱車や碎石場といった新しい技術に対応すべく、1899 年に掘られました。碎かれた鉱石は、金鉱石を処理するための最先端技術を採用した施設であった、近くの北沢浮遊選鉱場へ運ばれました。